



GT-R祭り

☆イベント当日の様様は本誌公式YouTubeチャンネルでも配信中!
bit.ly/2ZZlkvx





GT-R Magazine presents

FUJI SPEEDWAY

R's Meeting 2022 in 富士スピードウェイ

「帰ってきた」史上最大の

一時はイベントの開催自体が危ぶまれたものの、'20年、'21年と制限付きで縮小開催となったGT-R Magazine presents「R's Meeting」。そして'22年10月30日、3年ぶりにコースも使用するフルスペック開催が実現！ 久々に本来の盛り上がりを見せたイベントの様態をレポートする！

文：野田航也（本誌） 写真：北畠主税／木村博道／小林 健（本誌）／増田貴広（本誌）



富士がくっきり姿を現す絶好のイベント日和！





まだ辺りも暗いゲートオープン前から富士スピードウェイの西ゲートには多くのGT-Rが並んだ。開場前からRファンたちにとってのイベントはすでに始まっている！



これまでで最も遅い開催日だったこともあり、美しく雪化粧した富士山が拝めるのはR's Meetingでは珍しい。朝は肌寒かったが富士は早い時間から熱気に包まれた



3年ぶりに復活した歴代GT-Rによるパレードラン。12～17ページで紹介した通り、「ドリキン」こと土屋圭市氏がハコスカレーシングのレプリカで隊列に加わった！



昨年に続き、メイン会場のイベント広場の隣に位置するP12にて愛車撮影会Bコースも実施。こちらにはハコスカからR35まで型式ごとに駐車スペースを分けて展示



パレードランのみならず、メインステージ前にも高橋国光氏が駆ったハコスカレーシングのレプリカを展示。こちらは『プリンスガレージかとり』が製作した車両で、本物のKPGC10をベースに製作された貴重な一台

R's開発者トークショー



R32商品主管 **伊藤修令氏**



R33商品主管 **田口 浩氏**



R33／R34商品主管 **渡邊衛三氏**



R35ブランドアンバサダー **田村宏志氏**

R35開発陣トークショー



R35ブランドアンバサダー **田村宏志氏**

豪華ゲストのトークショーは過去最高の4本!

GT-Rの伝説を築き上げた面々が揃い踏み

メインステージでのトークショーは過去最高の4回実施！毎回お馴染みとなっている「R's開発者トークショー」には伊藤修令氏、田口 浩氏、渡邊衛三氏、田村宏志氏の歴代GT-R開発責任者が登壇。これほど豪華な顔ぶれが一堂に会するのはR's Meetingだけである！「R35開発陣トークショー」には田村氏に加え、R35開発責任者の川口隆志も登場し「R35はまだ続く」ことを宣言！ 2本立てとした

「ドライバートークショー」にはパレードランにも参加いただいた土屋圭市氏に加え、現役GT500ドライバーの千代勝正選手と平手晃平選手がそれぞれ初来場。千代選手はR35 Tスペックを購入したことをステージでサプライズ発表した。第2部には車両実験部の加藤博義氏、松本孝夫氏に加え、本誌でお馴染みの桂 伸一氏と木下隆之氏も参加。ためになる話のみならず会場を爆笑の渦に巻き込んだ！

R'sドライバートークショー①



R35開発責任者 **川口隆志氏**



土屋圭市氏



千代勝正氏



平手晃平氏

R'sドライバートークショー②



車両実験部 **加藤博義氏**



車両実験部 **松本孝夫氏**



桂 伸一氏



木下隆之氏





GT-Rファンの思いが一つになるからこそ

過去最高に匹敵する規模で開催
すべての人に心より感謝します

平成21(2009)12月に野田が本誌の編集長を拝命して以降、翌10年から13年連続で開催することができた「R'sミーツィング」。イベント復活を後押ししたのは読者の皆さんの声であり、ここまですべてが続いてこられたのもまた、GT-Rファンの皆さんの心強いサポートがあったからにはかならない。

20年の初頭から始まった新型コロナウイルスのパンデミックに翻弄され、「人が集まる」イベントの開催に大きな障壁が立ち上がった。それでも「継続すること」に意義があると考え、20年はR'sミーツィング初となる無観客開催に、21年も無観客の予定で開催直前で有観客に変更するなど、結果的にイベントを楽しみにしていた皆さんには多大なるご迷惑をお掛けしてしまった。

そして今年、いまだコロナの不安から解放はされていないが、「ウィズ・コロナ」の中で何ができるかを模索しながらようやく本来の形でイベントを開催することができた。

毎年イベントの準備で右往左往し、本番が近付いてくると当日の天気予報に一喜一憂する。ここ十数年は秋が近づくにつれ、イベントを無事に開催できるだろうか? という重いプレッシャーがのしかかる。それでも、当日に来場者の皆さんの生き生きとした笑顔が見られるだけで「また来年も頑張ろう」というパワーが漲ってくる。

来場者数7036名(7162名)、出展ブース数90小間(92小間)。カッコ内は過去最高を記録した19年の数字だが、それにほぼ匹敵する規模で開催できたことに安堵したとともに、イベント開催にご協力をいただいたすべての皆さんに心より感謝の意を表したい。

「19年開催時に少しでも近づける(戻

す)」ことがわれわれ主催側が掲げた今年の目標だった。過去最高に匹敵したのにはまさに望外の結果である。それだけ皆さんがR'sミーツィングを待ち侘びてくれたのだと思うと、主催者として来年以降のイベントに向けて今から身が引き締まる思いだ。

今年はGT-R使いのレジェンド 高橋国光氏を追悼することをイベントのテーマとした。19年に続いて特別ゲストとして来場いただいた土屋圭市氏。かれこれ25年ほど前、わたしがかつて在籍していたチューニング誌「ヤングパージョン」で氏の連載を担当して以降、レースで勝利を収めた時以外で涙する姿を見たのは初めてのことだった。

「GT-Rファンと一緒に国さんを追悼することができて本当によかった」という氏の言葉は、わたしにとって一生忘れられないものとなった。恐らく、国さんのヘルメットを被った土屋氏ドライブのハコスカレーシングと併走したパレードランの参加者も、一生の思い出になったことと思う。

もう一つ、今年のイベントを見て感じたこととして、イベント終盤まで来場者が多数残ってくれたことを挙げたい。遠方から来場している方々が多いこともあるのか、例年は午後になると少しずつ来場者の姿が減り始めていくのだが、今年は15時のフィナーレまでじつくりとブースを見て回る方々の姿が目立っていた。ブースの数が多いことはもちろん、回を重ねる度に出版社の展示内容およびPR方法が進化しているためだろう。R'sミーツィングを新製品やデモカーのお披露目の場として選んでもらえるようになり、普段は見ることができない意表を突く展示スタイルなど、来場者を飽きさせない創意工夫の賜物だと感じる。出版社や来場者、そしてゲストの皆さんのお力も借りながら、この先も「世界一のGT-R祭り」を継続しく所存だ。